

---

# 初雪

凧沚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初雪

### 【Nコード】

N7900C

### 【作者名】

風止

### 【あらすじ】

図書館で勉強しながら、私は隠れる場所を探した。私は一晩だけ図書館に残る。

## 第1話：図書館の空気

図書館で勉強する人が、一人また一人と減っていく中で私は黙々とペンを走らせていた。

まだまだ来ない閉館時間を前に、飽きてしまったのか大勢の学生が帰って行くのが目に止まる。

大学生など無断で泊まり込み、自分達の家のように自由に使っているというのに…。

大学生はこの時期、課題が山のように出るらしく、泊まり込んで勉強する人がいるらしい。

今、私の隣りにも半端ない荷物を持った人が座っていた。

中には、夜食や寝袋などが入ってるんだろうな…。

少し楽しそう。

私は向けられた勉強に飽きだしていたのかもしれない。

気分転換に館内を歩いた。

何時間も座っていたせいか、肩や背中が痛い。

伸びをしつつ、見上げた本棚は隠れるのに相応しいか考えた。

閉館時間が近づくにつれて隠れる場所を搜した。

残ってみたいと思った。

一階を搜したけれど、職員の人達が残っていて隠れることは出来なさそうだ。

皆は一体どこに隠れるんだろうか？

私は先程自分が勉強していた部屋に戻り、隣りにいた人にも聞いてみようと思った。

部屋に戻ると隣りにいた人はいなくなっていた。

もしかして、もう隠れたのかな？私も早く隠れなくちゃ…。

二階、三階と隠れる場所を搜したけれど、いまいちな場所ばかりで、隠れきれるような場所は無かった。

時計を見ると、閉館五分前：どうしよう？

館内の暖房が止められたのか、だんだん寒くなってきた。

私は隠れる場所を捜しながらマフラーを首に巻いた。

三階をうろつる彷徨うものの、人一人出会わない。

物音一つすることは無かった。

「6時になります。館内に残っている方は速やかにお帰り下さい」

突然の放送に私は罪悪感に包まれた。

やっぱり帰ろうかな？

私は残って勉強したいわけではないし、何かがしたいわけじゃない。

ただ残りたいだけ。ただの好奇心。

「帰ろうかな」

「帰るの？」

私の呟く声に反応してくれた誰か…。

「上、上見て」

頭から降り注いだ声に、その方を見上げる。

本棚がズラリと並ぶその一つに彼はいた。

本棚の一番上に乗る、顔をひょっこり覗かせ彼はにこりと笑った。

「あの私、隠れる場所とか分からないし、別に勉強したいわけじゃ無かったの…帰ろうかと」そう言うのと…、

「こっちおいで」と手招きしてくれた。

私が本棚に上ったとき、外では6時を知らせるかのように街灯が一斉に光を放ち出した。

「今から絶対に音を立てちゃいけないよ」

私は彼の言葉に頷いた。

後、荷物は一番下の本棚に突っ込むこと、携帯は電源切っておくこと、靴は脱いでおくこと。

私は全て言われた通りにした。

「良く出来ました」

何故だろう？彼は私を異様に子供扱いする。それが気になるが、悪い人ではなさそうだ。

それに、子供扱いされるたびに言われる言葉がすごく嬉しかった。館内の照明が落とされ、寒さは外と変わらない気がした。

寒さに耐えながら、本棚の上で俯せになりながら、本を読みながら、私に顔を向けて俯せになって寝ている彼の顔をチラチラ見ながら…。

この時間は私にとって忘れられない思い出になることは間違いないでしょう。

私は、この空気、この優しさ、この嬉しさ、このドキドキ、忘れたくない。自分のこの笑顔も忘れたくない。

パスン。

と情けない音が響いた。私の担任の先生と同じスリッパの音。

見回りがやって来た。

## 第2話：準備完了

息を殺し、見ていた本を静かに閉じる。

彼に目をやると、目を閉じながらも足音を気にしている感じだった。

部屋のある中心にある本棚。

そこから、右寄りの本棚の上に私達は隠れていた。

左側には、いくつもの本棚がずらりと並んでいる。

右側には数える程度の本棚が並んでいた。

本当にこんなところで見付からないのだろうか？と、不安になる。足音がハッキリ、クツキリ近付いて、私の心臓の音もハッキリ、クツキリ大きくなる。

「大丈夫だよ」

小声で彼が言った。

「うん」

私も小声で返事をした。

響き渡る足音が私達のいる3階にやってきた。

パスン、パスンと足音を立てて、鼻歌混じりでやってきた。

鼻歌を聞く限り女の人だと思う。

ギュツと目を瞑り足音が去るのを待った。

右側の階段からやってきた足音と鼻歌は、ゆっくりしたスピードで私達の前を横切って行った。

そして館内から職員は居なくなった。

ドアを閉める音や、帰り祭の車の音、全てが手に取るように分かった。

「じゃあー、館内から職員は居なくなっただけだけど、注意事項がいくつかあります。心して聞いてね」

遠足に来たみたい。

頭を過ぎり、込み上げる笑いを押さえ

「はい」と答えた。

「まず、ひとつ電気系を触らないこと。明かりや暖房も付けないように。後、トイレの電気もすっかり付けないようにね。ふたつめは他の“居残りさん”と関わらないように、ちなみに居残りさんは僕らみたいに残ってる人のことだからね。大抵の人は普通だけど、人によっては危ないことしてる人もいるからね。気を付けて。みつめは、悪いことはしないでよ。読んだ本は元に戻すし、ゴミはしないし、騒がないし、器物破損等など、以上三つのことキチンと守って下さい。良いですか？」

「はい」

良い返事と彼が言うから、私は少し恥ずかしくなって下を向いた。

あー後、と彼は言葉を続けた。

「なるべく俺から離れないでね」

それにはさすがに恥ずかし過ぎて私は頭を打ち付けた。

「取りあえず降りますか」

私達は俯せで寝転がっていた本棚を降り、荷物を持って近くの部屋に移動した。

本棚から降りるとき、荷物を運ぶときも何も言わず手を貸してくれた。

またしても頭を打ち付けてしまいそうな程に、恥ずかしく唇をキユツと噛んだ。

館内は真っ暗で電気を点けることも出来ない。

彼はスポーツ用品店で売っているような形の大きなバックを取り出した。

その中から懐中電灯を取り出した。

点けた明かりは部屋を明るく照らした。

「待ってて、ちょ、これ持って、手元照らして」

渡された電灯で彼の手元を照らしていると、彼はバックの中から色々な物を取り出した。

薄手の毛布、弁当やお菓子、そこまでは私にも理解出来る代物は

かりだけ後から出てきた紐やらなんやら、ごちゃごちゃとしたものが山のように出てきた。

「あつた、あつた」

やっと見付け出した品物はアルコールランプ。

「これ、もしかして手作り？」

「そうだよ」

父が家で呑んでいる酒の小瓶に似ていた。

それがアルコールを満たし、理科室に置いてあるまんまの姿だった。

彼はアルコールランプに鉄で出来た傘を被せ、マッチで火を点けた。

鉄の傘には穴が開いており、明かりを点したことで部屋中に星が現われた。

「うわ、すごい」

「でしょ？ なかなかの出来だと自分でも思ってるんだ」

私の堅い発想では永久にお目にかかれない代物だ。

アルコールランプを窓際から離れた机の上に置き、ごちゃごちゃした中から布を取りだし、念の為にカーテンのように窓に掛けた。



### 第3話：寒さと迷子

そして部屋の中を自分の定位置に移動させ始めた。

手伝おうか？と声に出そうとしたが、それより早く準備完了と声が響いた。

…？何が準備完了なのだろうか？部屋の真ん中に机と椅子を全て集結させて、適度に並べただけで、私には意味のわからないものだった。

「何が準備完了なの？」

「いや、特に意味はないんだ…秘密基地みたいじゃない…？」

「…わかんないや」

私達は館内を歩くことにした。

私が一人でふらりと旅立とうとしたら、危ないからと懷中電灯を渡され、二、三步進んだら、やっぱり俺も行くと言って着いて来てくれた。

「名前…」

「ん？」

「名前何て言うんですか？」

先程まで普通に話していたのに、改まって話すとなると敬語になつてしまう。

「敬語」

彼の言葉にドキツとしてしまう。心が見透かされたような気分。

「すいません、改まって話すとい…」

彼は不思議な顔で、私の言葉が聞き取れなかったのかと思い、もう一度繰り返した。

「いや、そうじゃなくて俺の名前は敬語」

「敬語さん？」

「何か発音おかしいな、圭吾だよ？け、い、ご」

冷やかされてるとばかり思ってたが、私の取り違いだった。

敬語と圭吾を間違うなど、まさに一言アホである。私は延々と頭の中で繰り返した。

恥ずかしさで顔が赤くなる。

ちらつと目を向けると、彼と視線がぶつかって、ぷつと二人で吹き出して笑った。

笑いながら二階へと階段を降りる。

階段を降りて私達は他に人が居ないか捜した。

冷えきった二階のフロアに人の気配は無かった。

まだ隠れているのかと思い、私が隠れようとした場所をひとつひとつ覗いて見たが

「そんなとこに居るわけじゃないじゃん」と彼の声が聞こえ、捜す場所のどこにも人は居なかった。

二階をくまなく捜したが人は一人も見付からなかった。

「一階行こうか」

その声に従い私は彼の後を追った。

先を歩く彼の背中を眺めながら、ゆっくり歩く。

とんとんと一定のテンポで下りる足音を聞いているように私には見えた。

踊り場で振り返り私に目をやり、また歩き出す。

何か嬉しかった。暖かい気持ちになれた。

こんな想いはずっと忘れていた。

私は笑みを堪えながら階段を下りた。

一階に辿り着くと寒さが一段と酷い気がした。 人の気配は二

階同様に感じられなかった。

入口の自動ドアが風でガタガタと揺れ隙間風が足下に流れ込んでいた。

「寒いね」

私が腕を組み足踏みしながら辺りをうろついた。

彼は辞書とか取ってくるから待っててと、私を一人残して本棚の壁に消えていった。

どうしたものかと、私は辺りを見回した。

夜の図書館はなかなか気味悪いもので、ホラー好きな私にはドキドキすることを考えさせた。

あの鉢植えの向こうから髪の高い女の人が、カーテンがかかった窓の隙間から、本の隙間から、自動ドアの向こうから、出てくるかも…。

想像は楽しいけれど、この状況で考えるのはあまり良いことでは無かった。

背筋がぞくぞくする。

あまりにも寒い館内で私は迷子になったように怖くなってきた。小さいとき迷子になったことを思い出した。

誰も居ない公園で母が私を追いかけていた。私はそれを笑いながら逃げ回っていた。

私は足が縛れ大きく転んでしまった。

膝から血が滲み出ている。

「おかあさん」

呼びかけて振り返っても母はそこには居なかった。

私は土を払い痛みを堪えて立ち上がった。

見渡して全てが分かる小さな公園。ブランコ、半分埋まったタイヤ、滑り台、母はどこにも居なかった。

私は泣き叫びながら母を呼び続けた。出口があり帰ることも出来た。けれども母を失ったまま帰ることも出来ずに、子供心に複雑な思いが心中に渦巻いていた。

「何ボーツしてんの？」

我に戻ると彼は私の顔を覗きこむようにしゃがみ込んでいた。

咄嗟のことに顔を赤らめ後退る。

#### 第4話：イベント発生

手を顔に当てて、悪いことしたわけでも無いのに言い訳を考えてしまっ。

私は後退りながら階段の段差に気付かず体勢を崩してしまった。

「うわわっ!!」

手をぶんぶん振り回しながら、後ろに倒れそうになる。

あっ倒れる。

そう思ったとき、彼の手が私に伸びていた。

私は彼の手に助けを求めるように手を伸ばした。

ぎゅと握った手は私を斜め45度の不安定な姿勢から救い出してくれた。

そのまま引き寄せられて彼の胸に吸い寄せられそうになる。

このままスッポリ収まっても問題は特にない。

そう思った自分が恥ずかしく愚かだと感じた。

私は彼の手を払い、両手で彼の胸を押し返した。

段差に足を取られて、助けられて、押し返して、私はまた段差の罅にかかってしまった。

「うわっ」

咄嗟に階段の手摺りを掴むも、腰辺りから落ちてしまった。

「おい、大丈夫か？」

周りの景色が回っているようだ。

立とうとしてもうまく立てない。あのとき、一人になったあのときでさえ私は一人で立てたのに…。

悔しくて、恥ずかしくて、情けなくて、痛くて、たくさんの感情がぶつかって私は泣いてしまった。

彼の声でさえ私には届かない。耳に入り、心をつくのだけど、私の心で門前払い、中には入れない状況。

久し振りに涙した私は、この涙の止め方を覚えていなかった。  
館内には泣き声が静かに響いた。

くだらなく流した涙を彼はどう受け取ったのだろうか？

座り込んだ私には彼の足もとが見えるだけ。

私から見える彼の表情も足もとだけ、履き古した黒いスニーカー  
がこちらに向いている。

「とうっ！！」

彼の声と頭部に鈍い衝撃。

痛みは無いが、鼻水が吹き出そうになる。

頭を押さえながら顔を上げると、もう一発頭にチョップをぶち込  
まれた。

「泣くなよ」

あまりにも悲しそうに言うので、また涙が溢れ出した。

さつきとは違う、人を想って泣いた綺麗な涙。 自分がかつこ悪  
くて泣いたのとは違う。

泣きじゃくる私の手を握り力一杯引き上げ私を立たせると、何も  
言わずに来た道を引き返しだした。

手を握り泣きながら私たちは階段を上った。

ぐずぐずと鼻をすすり、泣かないように迷惑かけないようにと思  
う度、彼のぬくもりが嬉しくて私は涙を止めることが出来なかった。  
初めて会った人なのに私何甘えてるんだろう？ってか初めて会っ  
たから甘えてるのか？友達だから言えることと言えないことってあ  
るし…。

未だに握られた手を見て視線をすぐに逸らす。 改めて見ると恥  
ずかしさが込み上げて、ニヤけてしまう。

彼のぬくもりにまだまだ涙してるけれど、悲しいわけじゃない嬉  
しいからだよ？

私の思い伝わってるかな？

三階に戻ってきた。

私たちが居た部屋からは、点けっ放しのランプの明かりが漏れだ

していた。

「もう大丈夫？」

涙を拭いくなづいた。

それから彼は一階に置き忘れた辞書を取りに、再び部屋を後にした。

机に突っ伏してアルコールランプが描いた光をぼんやりと眺めた。まだまだ寒くなる館内に私はマフラーを巻き直した。

何もかもがぼんやりとしていて何だか眠い。

泣き疲れたのかも。

あれだけ泣いたの久しぶりだったし。

何か今大切な時間過ごしている気がする…。

そんな気がする。

それだけ頭の中を巡って、何もかもが私の中から消えていった。

## 第5話：それぞれの考え

久しぶりに女の子が泣くのを見た気がする。

ドラマで女の子が泣くと、ドキッとして意味も無く焦ったりしてしまう。自分がその中の主人公になったような、自分がその子を泣かせてしまったような…。

自分は女の子に弱い。

「はあー」

先程、彼女が流した涙にどう対応すればいいのか分からず硬直してしまった。

自分でも考えがうまく纏まらず、言葉に出来なかった。

優しい言葉で慰めてあげたかったのに、出てくる言葉は軽くて安いプラスチックのようなものばかり…、言葉で伝えられないもどかしさと、小さくなっている姿を見て抱き締めたくなった。

けれど、今日初めて会ったばかりの人。

名前すら聞いていない。

辞書を手に取り先程彼女がうずくまっていた場所を後にした。

部屋に戻ると彼女は寝ていた。

最初見たとき泣いているのかと思ったが、のぞきこんだ顔は穏やかで可愛かった。

持って来ていた毛布を起こさないように彼女の肩に掛け、少し離れた席で辞書を開いた。

夢を見たようだ。

覚えていないけれど、どうやら悲しい物語だったみたい。起き上がって頬を伝った冷たいものを手の平で拭いた。

あれだけ泣いたのに…、まだ枯渇にはほど遠いのかな？

肩には彼が持ってきていた毛布がかけられていた。

自分にかけられた毛布をギュッと握り、彼を捜した。

少し離れた席で彼は寝ていた。

スー、スーと寝息を立て、辞書を枕にして気持ち良さそうに眠っていた。

毛布を返そうかと思ったが、彼の肩にも私と同じ毛布がかかっていたので、ありがたく使わせてもらうことにした。

携帯を開いて、今の時間を確認する。

「12時半か…」

8時頃から寝ていたから結構寝たんだなあ。

そうして私は前々から読みたいと思っていた本達を見付ける旅に出た。

ふと目を覚ますと開かれた辞書が枕になっていた。

「あれ？」

開かれたまま枕にしたせいで、ページが折れてしまっていた。

しかもヨダレで汚してしまっていた。

ごめんなさい…、心で呟いて辞書を閉じた。

顔を上げると彼女が居ないことに気付く。

毛布もないし、どこに行ったのだろうか？

心配になって捜しに行こうと立ち上がると

「おうっ」と声がした。

視線をやると彼女は床に座り本を読んでいた。

「おうっ」とは俺が急に立ち上がったことにビックリした声だったらしい。

「続けて下さい」

「はい」

小さく答えて彼女は本に目を戻した。

俺は新しい辞書を取りに一階に向かった。

彼女は知ってか知らずか、何も聞かなかった。

なるほど。



本の内容と彼の行動の理由に一人納得した。

私が座っていたから、見えなかったんだね。

私は椅子に戻り、また本に目を落とした。

たまに思い出したように彼の方を見る。

彼は辞書を取りに行ったまま帰って来ておらず、次に見たとき、

いつの間にか戻って来ていて

「おうっ」と声に出しそうになった。

その後、けっこう時間が経ってから彼を見ると辞書を開いて眠っていた。

## 第6話：二度目の初雪

鳥の鳴き声で我に返る。

集中し過ぎた。

彼を見ると辞書の悲惨さが目に入った。

今何時だろう？と、開いた携帯に私は彼を叩き起こした。

「起きて圭吾さん!!」

寝起きは良い方なのか？彼はすんなり目を覚ました。

「初めて俺の名前呼んでくれたね」

ぐへへと笑う彼を見て、顔が赤くなっているのが分かる。が…、

私は持っていた携帯を彼の前に突き出した。

「げ…」

急いだ。

急ぎまくった。

只今の時刻7時半、後少しすれば職員の人達が来てしまう。

私は本を片付けるのに走り、彼は部屋の片付けに集中した。

「本を片付けたら一階のトイレの前で待ってて」そう言われたので、私は自分の読んでいた本と彼の枕を片付けトイレに急いだ。

一足先に着いたらしく、上から忙しく階段を下りる足音が聞こえた。

「お待たせ、じゃあ急ごう着いて来て」

そう行つて彼はトイレに入つて行つた。

もしや…。

予感的中した。

慣れた感じで荷物を窓から投げると自分も後から続いた。

「大丈夫？」

彼はひょいっと軽く窓から抜けて行つたけれど、何気に窓の位置が高い。

彼が居たから良かったものの、一人だけなら危ないところだった。

夜の図書館は危険がいつぱいだった。

やっとの思いでトイレから外に出ると、雪がちらついていた。

「初雪…」

「初雪って、三日前に降らなかったっけ？」

「そうだけど、俺たちが会って初めての雪だろ？」

「…毎回よくそんな恥ずかしいと言えるね」

さすがに呆れてしまった。

「私は…初雪が今日なら私は二度目の初雪に期待したい」

彼は首を傾げていた。

もし次、雪が降ったときには彼と一緒に居たい。初雪も大事だけれど、次会えなかったら悲しいもんね。

そしてその日は意外にあっさり別れた。

数日後、私は雪の中走っていた。

図書館が見える。

そのうち、近づくにつれ人がちらほら目に付く。

私は裏に廻り、トイレの窓がある場所を目指した。

図書館を壁伝いに走り、次の角を曲がったらトイレの窓がある。

そこで彼はきつと…。

あの初雪と同じ時間。

白い息が宙に消える、とうとう来てしまった。この角を曲がれ

ばきつと彼が居る。

息を整える。

いざ、尋常に…！

バツと角から身を出したが…、そこには誰も居なかった。

足跡すらない。

始まってすらいなない恋が空しく終わろうとしていた。

雪の上に座り込み泣いた。最近泣いてばかりだな…と、思い彼

の顔が浮かんで来た。

「うわあぁん」

頭では冷静に処理しているのに、感情が高ぶって涙が止まらない。

「また泣いてるの？」

顔を上げるとトイレの窓から彼が覗いていた。

「こっち来いよ」

彼は照れくさそうに手を伸ばした。

…が届かず。しかも

「ごめん動けない」

二度目の初雪は、少し泣いて笑いまくった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7900c/>

---

初雪

2010年10月8日15時59分発行